

2013 年度「教養教育・学部共通コース FD 研究開発プロジェクト」  
スポーツマネジメントに関する実習科目の設置の可能性  
～コース生によるスポーツイベントのマネジメントの実践を通して～

スポーツサイエンスコース

申請代表者：松永 敬子（経営学部）

共同研究者：窪田 通雄（法学部）

佐々木浩雄（文学部）

## I. FD 研究開発プロジェクトの目的

本プロジェクトは、スポーツマネジメントに関する実習科目の設置の可能性を模索するため、スポーツサイエンスコース生による、スポーツイベントのマネジメントを試験的に実践することを目的としている。学部共通コース・スポーツサイエンスコースには、人文・社会科学系の選択必修科目として、「近代スポーツ史」「現代スポーツ論」を設置している。この 2 科目を基礎とし、スポーツマネジメントに関連する科目として、スポーツビジネス論・スポーツマネジメント論・スポーツマーケティング論・スポーツ政策論・地域スポーツ論を設定している。受講生は、経営学部・経済学部・法学部・政策学部の学生であることも影響し、スポーツマネジメントに対する関心は比較的高いといえる。しかし、いずれの関連科目においても座学における理論が中心であり、マネジメントの実践については、授業時間外の個別のフィールドワークおよび授業内のグループワークの中で補っているのが現状である。2011 年度のプロジェクト E の報告書でも述べたが、スポーツマネジメントという領域は、スポーツの特異性を理解した上で、実際にマネジメントに関わるという実践経験が非常に重要である。理論を学ぶだけではなく、実際に現場において企画・運営・評価について実践することで、さらに複合的なマネジメントの能力が身に付く。また、スポーツサイエンスコースのカリキュラムは、公益財団法人日本体育協会公認アシスタントマネジャー資格の養成コースとしても認定されているため、資格取得を希望する学生に対して、義務付けられてはいないがスポーツマネジメントの実践を経験する場を設定することが必要となる。

そこで、本プロジェクトでは、スポーツマネジメントに関連する実習科目の設置等の可能性について検討する。実習科目を設置する場合は、スポーツサイエンスコースでは、4 セメスターにスポーツビジネス論、5 セメスターにスポーツマネジメント論、スポーツ政策論、6 セメスターにスポーツマーケティング論、地域スポーツ論を開講しているため、主に、スポーツマネジメント論を受講する学生を中心に、5 セメスターから 8 セメスターの中で、半期か通年において履修可能となる実習科目を想定している。主な授業概要は、スポーツイベントの企画・運営・評価の実際であり、企画・運営などのマネジメント全般、特に、企画段階から評価に至るまでの随所で必要となるマーケティング・リサーチについて深く学ぶ。つまり、実際に、学内外にて開催予定のスポーツイベントの企画・運営・評価までを実践し、経験を積むことで、スポーツマネジメントの実践について体得するだけでなく、授業やゼミの枠を超え、さまざまなスポーツの領域を学ぶ学生の英知を集約すること、さらにその仲間と 1 つのもの（事業・イベント）を創り上げるという達成感を味わうことで、コースおよび大学に対するコミットメントを醸成することにも繋がることを期待している。

## II. FD 研究開発プロジェクトの内容

本プロジェクトでは、2 つの視点から検討を深める。まず 1 つ目は、「スポーツマネジメント実習科目」の創設について検討をするために、試験的にスポーツイベントのマネジメント（企画・運営・評価）の実践に携わりたいというスポーツサイエンスコースの学生を募り、スポーツイベントのプロジェクトを立ち上げ、企画・運営・評価の実践を行い、検証を行うこと。そして、2 つ目には、先進的な大学の取り組みとして、広島経済大学「興動館教育プログラム」の事例を参考に分析を進めることである。

以上の2つの視点から、スポーツマネジメントに関する実習科目の設置の可能性について検討する。

### Ⅲ. FD 研究開発プロジェクトの実施と検証

#### 1. スポーツイベントのマネジメント（企画・運営・評価）の実践

スポーツサイエンスコースでは、スポーツマネジメントに関連する科目として、特に、スポーツビジネス論・スポーツマネジメント論・スポーツマーケティング論・スポーツ政策論・地域スポーツ論を設定している。本プロジェクトでは、ワールドカップアジア最終予選のパブリックビューイングと2012年の第1回京都マラソン2012から続けているプロジェクトの2つのイベントに関して、コース生の参加を募ったところ、パブリックビューイングでは、スポーツマネジメントゼミ以外のコース生が約5名参画した。しかし、継続的に実施している京都マラソンのプロジェクトの参画者はおらず、スポーツマネジメントゼミでプロジェクトを進めることとした。ここでは、パブリックビューイングの「龍谷大学スポーツサイエンスコース日本代表応援プロジェクト」と「京都マラソン×龍大スポマネ1ab. ×京念珠」プロジェクトのマネジメント実践（企画・運営・評価）について、スポーツサイエンスコースの実施記録を参考に報告する。

#### (1) 「龍谷大学スポーツサイエンスコース日本代表応援プロジェクト」の概要

##### 【企画の目的】

今回は、ワールドカップのアジア最終予選ということもあり、次年度の本大会に向けた準備と位置付け、以下の目的で企画を実施した。

- **龍大生と教職員の龍谷大学の一員としてのアイデンティティの向上**  
龍谷大学生と教職員が対象のため、同じ大学に所属する仲間と一緒に応援することで、一体感が生まれ、応援する楽しさを共有することで仲間意識が生まれる。
- **体育局（重点・強化サークル）の試合の観客動員の増員**  
上記の龍谷大学の一員としての仲間意識が生まれることで、体育局（重点・強化サークル）の試合の観客動員数の増加にもつながる。パブリックビューイングでスポーツをみる楽しさや、みんなで応援する楽しさを、まず感じてもらい、実際に大学スポーツを応援することへ繋げていきたい。
- **イベント運営を通じて、スポーツマネジメントの実践学習**  
実際に、イベントの企画運営を自分たちで行うことで、理論だけではなく、実践として学ぶことができるため、学習の向上とこれからの意欲の向上に繋げる。
- **龍谷大学スポーツサイエンスコースの認知度向上**  
今回の企画では、まだ、コースに所属していない学生には、スポーツサイエンスコースという選択肢があることを伝えることができる。また、スポーツサイエンスコースを大学内外にも周知し、認知度を向上させる。

##### 【運営】

ワールドカップのアジア最終予選 VS オーストラリア戦における、「龍谷大学スポーツサイエンスコース日本代表応援プロジェクトプロジェクト」の運営の概要は以下の通りである。

- **日時・場所**  
2013年6月4日(火) 深草キャンパス 22号館 101教室
- **目標観客動員**  
300名
- **主なプログラム**
  - ① フェイスペイントイベント

受付時から司会が始まるまでの時間に行う。サッカーをあまり知らない人でも楽しめるイベントとして開催。代表戦を盛り上げる雰囲気づくりの一環として企画。

#### ② KICK OFF 前 モチベーションビデオ放映

会場の一体感と来場者の試合へのモチベーションを盛り上げるために行う。モチベーションビデオに会場使用にあたる注意事項等も記載。

#### ③ 体育局長および応援部との応援コラボ

キックオフ前の応援練習。試合中の応援チャントのリードを応援部に依頼。「スポーツ観戦」の応援の盛り上げに加えて、体育局重点・強化サークルへの興味を醸成するため、体育局長による挨拶も実施。

#### ④ アンケート調査

スポーツマネジメントの実践学習の一環として、今回のイベントの評価・感想を調査し、評価・改善に利用し、今後の企画に活用する。また、体育局重点・強化サークル「龍産戦」の試合観戦プロモーション活動にも利用する。

#### ⑤ 記念撮影

一体感を高めると同時に記録とする。

#### ➤ 龍谷大学スポーツサイエンスコースの認知度向上

今回の企画では、まだ、コースに所属していない学生には、スポーツサイエンスコースという選択肢があることを伝えることができる。また、スポーツサイエンスコースを大学内外にも周知し、認知度を向上させる。

### 【評価】

目標観客動員 300 名を達成することができ、アンケートの満足度も非常に高かった。しかし、運営面において、課題もあり、次年度の本大会に向けてしっかり改善する必要がある。また、体育局重点・強化サークル、特に硬式野球部の伝統の龍産戦の観客増員を目標に掲げており、当日の7割の参加者が体育局以外の学生であったことは次回に繋がる基礎データとなった。しかし、具体的なマネジメント実践にまで繋げることができなかったことは大きな課題である。



写真1. ワールドカップアジア最終予選 VS オーストラリア戦に「スポーツサイエンスコース 日本代表応援プロジェクトプロジェクト」 於：深草キャンパス 22号館 101教室

## (2) 「京都マラソン×龍大スポマネ lab. ×京念珠」プロジェクト」の概要

### 【企画の経緯】

スポーツマネジメントを学んでいる私たちは、スポーツイベントの企画に当たって、第1回大会となる京都マラソンの開催時に復興支援として何かできないかと考えた。それは、京都マラソンが、東日本大震災から丸1年後の2012年3月11日に開催され、東日本大震災復興支援と京都・日本の活性化をテーマに掲げていたからである。

まずはリサーチ(情報収集)を行うと、震災直後に行われた(2011年4月18日)ボストンマラソンにおいて、ハーバード大学の学生が日本のために何かできないかと「Hope for Japan」と書いた赤いリストバンドを作り、販売したことを知った。そこから着想を得て学生のまちである京都の学生が手作りで何かを作ろうと考え、京都マラソンのもう1つのテーマである京都・日本の活性化というところから、京都の伝統産業を取り入れようと思いついた。その頃、京都の数ある伝統産業の中で、近年、低迷が続いているという内容で報道をされていたのが、西陣織であり、私たちは京都の西陣織の復興にも着目をした。さらに、西陣織は京都で開催されている歴史のある全国都道府県対抗女子駅伝で、ゴールテープとたすきにも使用されており、西陣織をブレスレットにすることで、この企画のテーマでもある『復興支援の輪(和)』との掛け言葉になり、復興への思いを込めることができると考えた。マラソンで走っている際にもブレスレットなら身に付けやすく、人目に触れる機会が多い。さらに、それを人々が見かけることで、西陣織のことや京都の文化に触れてもらうきっかけにもなる。そこで、第1回京都マラソン2012では、「京都マラソン×西陣織×スポーツ学生プロジェクト」として、西陣織ブレスレットを製作・販売し、850本を売り上げ、43万5,500円を義援金として寄付をした。さらに、第2回京都マラソン2013では、西陣織の染糸を使って、伝統的な組み紐の木製の台を用いて製作する京くみひもに着目し、「京都マラソン×京くみひも×龍大スポマネプロジェクト」として、京くみひもブレスレットを製作・販売し、500本を売り上げ、25万3,000円を義援金として寄付をした。

### 【運営】

西陣織と西陣織の染糸を使った京くみひもに引き続き、京都の伝統工芸の活性化について調べ、ブレスレットという視点で、京念珠に着目することとなった。京都念珠製造販売事業協同組合様に全面的にご協力を頂き、今井半念珠店の今井氏にはその架け橋となって頂いた。そもそも京念珠には、108個の煩惱を滅するという効果があり、念珠の両端には天珠と呼ばれる2つの透明な珠があり、それを京都と東北に見立てた。

大会主催者である京都市の京都マラソン実行委員会にも企画にご賛同を頂き、京都マラソンの前日と前々日のエントリー受付時と当日に、京都市勧業館「みやこめっせ」内の特設ブースにて、1つ500円~600円で京念珠ブレスレットを販売させて頂いた。ブースの使用料については、京都市様のご厚意により、特別に無料で提供をして頂いた。マーケティング活動には欠かせないプロモーション活動の体験もした。学長室広報の方にもお世話になり、メディアへのプレスリリースや大学とスポーツサイエンスコースのホームページにも活動内容を掲載させて頂き、京都市内の記者クラブでの会見にもチャレンジをした。

その効果もあり、新聞にも取り上げて頂き本当に貴重な体験をさせて頂いた。最終的には、目標であった500個を売り上げ、26万8,200円の義援金が集まり、それらを東北の小学生にスポーツを通した活動を行う「スポーツこころのプロジェクト」に寄付をすることとなった。



写真2. 「京都マラソン×龍大スポマネ lab. ×京念珠」プロジェクト 於：みやこめッセ

### 【評価】

3回目を迎え、まだまだ東北の被災地の復興には時間を要するにも関わらず、風化が進んでいるように感じる。売り上げにも顕著に現れているが、今回もこの売上金の全額を義援金として東北に寄付をする。募金活動等で募金をしたお金の行方の多くは一旦赤十字社に行くそうだが、本当に被災者の手元に届き、役に立つ使われ方をするのにどれくらいの期間がかかるのか。そして、どのように実際使われたのかは不明のままであることが多い。今回もこのように自主企画のスポーツイベント（プロジェクト）に関わったこと、そして、スポーツマネジメントを学んでいる学生だからこそ寄付をして終わるのではなく、一連の流れを評価の一環として捉えることも勉強だと考えた。つまり、寄付をした義援金がどのように使われているのかを自分たちの目で見ただけでなく、実際にその「スポーツこころのプロジェクト」のサポートスタッフとして被災地に足を運び、ボランティアとして参画をさせて頂いた。

「スポーツこころのプロジェクト」とは、公益財団法人日本体育協会、公益財団法人日本オリンピック委員会、財団法人日本サッカー協会、一般社団法人日本トップリーグ連携機構の4団体が主催する事業で、その経費の9割を独立行政法人スポーツ振興センターが実施主体となっているスポーツ振興くじ（toto）で賄い、残りの1割は寄付を募っている。日本のスポーツ界が丸一となり、東日本大震災で被災したすべての子どもたちの、「こころの回復」を応援し、遊び（スポーツ）の時間では「笑顔」を、トップアスリートによる夢先生の授業では「夢」と「あきらめない気持ち」をテーマにしているプロジェクトである。今年度も昨年度に引き続き、寄付先である「スポーツこころのプロジェクト」の笑顔の教室に補助スタッフとして、2013年9月に参画をした。

次年度は、龍谷大学の深草町家キャンパスを活用して、地域の方々と共に活動ができるよう、さらにマネジメント実践の幅を広げていきたい。

復興支援のため京念珠を製作  
した龍谷大の学生＝左京区で



## 東日本 大震災

### 龍大生製作、ランナーに販売

東日本大震災の被災 谷大スポーツサイエ  
地を支援しようと、龍 スコースの学生が輪  
ランナーらに販売し、

「おこしやす広場」で  
は2012年から、京  
都マラソンに合わせ西  
陣織を用いたプレスレ  
ットなどを製作し売上  
金を被災地に寄付し、  
今回で3回目。木の玉  
が並ぶ念珠の両端に京  
都と東北に見立てた水  
晶の玉をあしらってい  
る。一本5000～60  
0円で500本販売す  
る予定。京念珠の製作  
体験もできる。  
製作に関わった学生  
たちは昨年9月、宮城  
県石巻市や福島県相馬  
市の小学校で日本オリ  
ンピック委員会などが  
主催するスポーツを通

## 京念珠で「支援の輪」

と「絆」をテーマに京  
念珠のプレスレットを  
製作した。京都マラソ  
ンに合わせ、14～16日  
に京都市左京区のみや  
こめっせに設置される  
「おこしやす広場」で  
は2012年から、京  
都マラソンに合わせ西  
陣織を用いたプレスレ  
ットなどを製作し売上  
金を被災地に寄付し、  
今回で3回目。木の玉  
が並ぶ念珠の両端に京  
都と東北に見立てた水  
晶の玉をあしらってい  
る。一本5000～60  
0円で500本販売す  
る予定。京念珠の製作  
体験もできる。  
製作に関わった学生  
たちは昨年9月、宮城  
県石巻市や福島県相馬  
市の小学校で日本オリ  
ンピック委員会などが  
主催するスポーツを通

京都新聞(夕刊)

2014年2月13日(木)

◆龍谷大 大震災の復興支援事業の学生が念に寄付する。

◆京都マラソンをP Rする龍谷大のプロジエクト。スポーツサイエンスコースの約30人が京都念珠製造販売事業協同組合の協力を得て500個を作った。

◆水晶と赤メノウを1個ずつはめ、京都と東北をつなぐ輪の思いを込めた。5種類で1個5000～6000円。代表の経営学部3年吉川大智さん(21)は「復興を願う気持ちを伝えたい」と話している。(松尾浩道)

記事1. 毎日新聞 2014年2月13日(木)京都面

記事2. 京都新聞 2014年2月13日(木)夕刊

## 2. スポーツイベントのマネジメント(企画・運営・評価)の検証

今年度は、2つのスポーツイベントのマネジメント実践実習を展開したが、ワールドカップアジア最終予選のパブリックビューイング「龍谷大学スポーツサイエンスコース日本代表応援プロジェクト」では、スポーツサイエンスコース生および体育局所属の学生が参画し、コース全体のプロジェクトとして意義のあるものであったといえる。しかし、体育局重点・強化サークルの応援および観戦に結び付けるためのマネジメントには課題が残る結果となった。次年度はワールドカップの本大会であるため、マネジメント(企画・運営・評価)の評価であるPDCAサイクルをしっかりと学ばせ、次年度に繋げたい。また、京都マラソンでの「京都マラソン×龍大スポマネ lab. ×京念珠」プロジェクトについては、結果的にスポーツマネジメント研究室の学生のみであった。しかし、京都マラソン自体に関わることへの興味、関心が高いことが分かり、次年度は、このプロジェクトとは差別化した京都マラソンボランティアの実践についてもコーディネートすることを検討したい。

以上のように、スポーツサイエンスコースにスポーツマネジメントに関する実習科目が「スポーツマネジメント実習」などとして創設されることは、さまざまな面において学生の成長を促すことになると考えられる。単にコースイベントという位置付けで有志を募って展開することも可能ではあるが、教員や大学のサポート体制や社会貢献の視点からも、スポーツサイエンスコースの教育の一環として組織的に取り組むことの意味は非常に大きいと考える。この点に関しては、他大学の取り組みの中で、特に、スポーツ領域に関する先進事例を参考に、さらに検討を深めたい。

### Ⅲ. 他大学の先進事例

#### 1. 広島経済大学「興動館教育プログラム」の事例から学ぶ

2014年2月に広島経済大学へ訪問し、スポーツ経営学科の松本先生をはじめ、興動館教育プログラムに関わる専任職員の友松氏および活動する学生のみなさまにヒアリングを行った。(本学からは松永、佐々木が参加した。)

今回の広島経済大学の取り組みは全学的なものであり、今回の学部共通コース・スポーツサイエンスコースという枠組みとは異なるが、システムや科目設定、そして支援体制などは非常に参考になった。主な内容は以下の通りである。(ヒアリングと大学HPを参考)

##### (1) 広島経済大学「興動館教育プログラム」の概要

平成17年7月に開館した興動館を拠点に展開されている「興動館教育プログラム」は、平成20年度経済産業省「体系的な社会人基礎力育成・評価システム構築事業」に、「実践を通じた社会人基礎力の育成と評価システムの構築・導入～広島経済大学興動館教育プログラム～」として採択されるなど、これまでに大きな実績を残してきた。この興動館教育プログラムは、実践を通じて知識やスキルを身につける「興動館科目」と、そこで培った能力を行動することによって自らの成長につなげる「興動館プロジェクト」から成っており、2つの学びが相互に作用し、実社会で活躍するための「人間力」を獲得できる教育プログラムとなっている。

##### 1) 「興動館科目」

興動館科目は、すべての学生が自由に選択できる科目群で、卒業単位にも含まれる。(スポーツ経営学科は一部の科目のみの履修。)この科目では、「フィールド」という考え方を採用し、学問領域ではなく、達成されるべき目標で科目を分類している。フィールドには「元気力」「企画力」「行動力」「共生力」の4つがある。

##### 2) 「興動館プロジェクト」

興動館プロジェクトは、学生が主体となってさまざまな活動にチャレンジできるプログラムで、学科、学年の枠を超えて学生が参画する。活動時に直面する課題や失敗をクリアしながら、成功を目指して活動に取り組む中で、社会で役立つ「人間力」を磨く。学生は、「新規プロジェクトを立ち上げる」と「既存プロジェクトに参加する」の2つの関わり方を選択できる。

##### 3) 活動拠点「興動館」の施設概要

興動館は4階建てのビルで学舎からは独立しているのが特徴である。1Fは学生や興動館教育プログラムサポートスタッフ、地域の人々などが集まり、交流を深める空間となっている。注目すべきは、学生が運営するカフェ『HUE Cafe「Time」』で、ここでは各種イベントも催され、地域の人々や学生の憩いの場となっている。2Fは「興動館プロジェクト」の活動拠点となり、ミーティングやワークをする環境が整備されている。3Fは「興動館科目」の学びが展開されるフロアでゼミ教室が複数設置され、担当教員の研究室も併設されている。最後に4Fはプロジェクトの活動や授業のほか、合宿や研修など宿泊施設としても活用でき、多様な活動に対応するフリースペースとなっている。

##### 4) 入試制度にも導入(参考)

広島経済大学のA0入試のアドミッションポリシー(求める人材像)は、興動館教育プログラム(興動館科目、興動館プロジェクト)に興味関心を持ち、入学後は興動館プロジェクトに参加することができる人と掲げている。入学後は、「興動館プロジェクト」に必ず参加し、自らの可能性を広げるために様々なことをチャレンジすることが課せられ、「興動館プロジェクト」において、中心的役割が担えるような「人間力」を身につけ、大学の目指す「興動人」として活躍する人材として期待されている。

以上のように、広島経済大学では、学生教育の一環として、「マネジメントの実践をサポートするハードとソフト（施設とシステムとプログラム（カリキュラム）」が整備され、入試制度まで導入するなどの全額的な組織体制を確立している。実際に、学生が運営するカフェで活動する女子学生さんにヒアリングをしたが、目を輝かせ、充実した学生生活についていきいきと語って頂いた。収支面や学生スタッフのシフトの件など、課題もあるようではあったが、アルバイトでは得られない経営に直結する貴重な学びの実践の場で確実に成長していると感じた。今回のFD研究開発プロジェクトのテーマとはスケールが全く異なるが、基本的な考え方や仕組みづくりについては非常に参考になった。

## 5. まとめ ～スポーツマネジメントに関する実習科目の設置の可能性～

今回のFD研究開発プロジェクトの計画には入っていなかったが、スポーツサイエンスコースでは、平成25年度文部科学省委託事業「地域を活用した学校丸ごと子供の体力向上推進事業」において、「運動能力分析に依拠した子どもの体力向上プロジェクト」に取り組んだ。この事業では、運動能力分析を専門とする長谷川研究室を主軸とし、マネジメントの役割として松永研究室と窪田研究室が参画した。今回のFD研究開発プロジェクトでは、スポーツマネジメントに関連する科目「スポーツマネジメント実習」の創設についての検討を行うために、試験的に2つのスポーツイベントを実践したが、今後は他領域との連携・協力を踏まえたプロジェクトについても検討の余地がある。

今年度の計画を遂行していく中で、スポーツサイエンスコース全体でプロジェクトを展開する可能性も含め、今後は継続的で多岐に渡るさまざまなサポートが必要である。そのためには、組織の位置付けも重要となりそれがサポート体制にも繋がるものと考えられる。今回の広島経済大学のケースは、本学の組織では龍谷エクステンションセンター（REC）が近い形と考えられるため、今後の連携・協働についても模索したい。

他大学の展開を参考にしても分かるように、ただ単にコースのスポーツイベントを実施するという捉え方ではなく、教育的要素を踏まえた実習科目として位置付けることの重要性を再確認することはできた。つまり、スポーツマネジメントの実践について体得するだけでなく、授業やゼミの枠を超え、さまざまなスポーツサイエンスの領域を学ぶ学生の英知を集約すること、さらにその仲間と1つのもの（イベント）を創り上げる達成感を味わうことで、コースおよび大学に対するコミットメントを醸成すること、それが社会貢献にも繋がることは確実であるため、そのシステムと組織体制について、検討することは急務であるといえる。しかし、その際の単位認定などについては、引き続き慎重に検討したい。